『横浜芹沢文学読書会』　報告

代表　池田三省

日時：2024 年 7 月 14 日（日）　13:00～16:30

場所：「自家焙煎珈琲屋 三省さん」（喫茶店）

（横浜市金沢区谷津町 265-2）

テキスト：『完全版 人間の運命』**『人間の運命１「次郎の生いたち」2 章』**

（1 章は、2024/6/16 実施済）

参加者：１１名

（初めに）

■読書会の形式について。（輪読形式の読書会）

①当日、対象の章を読む。

・事前に読まなくてもいい。もちろん事前読んで感想を語り合うのがベストですが・・。

・当日、財団 HP に掲載されている加藤史也氏の朗読（人間の運命）を聞きながら、各自テキストを読む。

・当日配布される「簡単なレジメ」に添って感想を話し合う。

②今年１年間は使用するテキスト「完全版 人間の運命１ 次郎の生いたち」は各自準備して下さい。（インターネット（１８００円）で購入できます。）

※当日本がない時は隣の方に見せてもらってください。

（注）「完全版 人間の運命１ 次郎の生いたち」は「海に鳴る碑」と同じ内容です。

「海に鳴る碑」を持っている方は「完全版 人間の運命１」購入不要です。

③読書会のイメージ

・13:00～14:00　朗読を聞きながら読書する。（珈琲を飲みながら）

・14:00～15:00　（前半）レジメに添った感想を語り合う。

・15:00～15:30　休憩（珈琲タイム）

・15;30～16:30　（後半）レジメに添った感想を語り合う。

・16:30～17:00　解散（次回日程を決める）

■次回　①8 月 25 日（日）13:00～　（人間の運命１ 次郎の生いたち　第 3 章）

②9 月 15 日（日）13:00～　（人間の運命１ 次郎の生いたち　第４章）

（都合がつけば、お友達も誘って参加ください・・。）

第１回　『完全版『人間の運命』　の紹介　　2024/6/16　　池田三省

■完全版「人間の運命」出版の経緯　（完全版「人間の運命」刊行の辞より（勝呂奏））

・「人間の運命」は、一部 6 巻、二部 6 巻、三部２巻の計 14 巻を、昭和 37 年(1962)から、昭和 43 年(1968)まで 6 年間（66 才から 72 才）かけて完結した。
・昭和 47 年（1972)「遠ざかった明日」。人間の運命の続編として書き下ろした。
・昭和 49 年（1974)「海に鳴る碑」。書き下ろした。
・芹沢先生は、全 14 巻に「海に鳴る碑」「遠ざかった明日」を併せ、全 16 巻と生み落としたいと希望であった。
・「私達の世代の生きた証言を後に来る人々に残したい」と光治良は語っている。
・岡玲子さんの希望で平成 25 年(2013)（没後 20 年を迎えて）に完全版「人間の運命」全 16 巻が勉誠出版から出版された。

■「人間の運命」の魅力について

(1)「国文学 解釈と鑑賞９ 1997 第 62 巻 9 号」　井上謙より

・「人間の運命」の「あとがき」によるとテーマを模索した。とある。
①社会小説は書きたくない。
②社会小説ではなく、明治という時代をどう生きたかを証言する。**私たち**の世代の伝記を書いてみたい。
③自分を書き、また人間の宿命や日本の歩みを書こう。
④日本という、前近代的なものを多く内蔵した国家の枠から逃れられなかった宿命とその哀れをどう表現したらよいか。
⑤日本を象徴するように、舞台に故郷を選べば、人間生活と歴史のあとを、あやまりなく表現できる。

(2)「人間の運命」の魅力　（野々宮紀子より）

・明治・大正・昭和という壮大な時間の流れの中に、歴史的事実を背景にして、主人公森次郎をはじめ。様々な人物が登場し、「貧困、教育、友情、愛、出会いと別れ、信仰、戦争、再生」人生における根本的な問題を自ら経験したこれらのテーマが盛り込りまれている。　大河小説としての要素、魅力を十二分に備えた作品です。
・「人間の運命」は日本の近代そのものである。
・芹沢文学作品を正しく読み取るなら、読者は作家の魂を受け継ぎ、育てられるのだ、作家の精神は永遠に生かされるのだという。
・「人間の運命」が私たちの心に働きかけ、喜びへと導き、離れがたくする、そういう力があることは確かである。

(3)勉誠出版「人間の運命 1 次郎の生いたち―序巻」紹介文

・世界に誇る大長編・大傑作の完全版を初公開!
・明治・大正・昭和の激動の世紀を、日本人はいかに苦難と苦悩の道を歩み、希望をつないで

きたか。時代の証言として描く近代史。

・序章となる本巻では、主人公・森次郎の誕生から、幼い頃の日々を描く。
叔父・史郎の死を遠因に信仰に目覚め、全財産を捧げた父・常造は、母・兄とともに伝道師となり村を出る。残された次郎は、祖父母と 2 人の若い叔母と 5 人、苦しい生活を送ることになるが、貧困・悲哀・孤独は、次郎に幼い内から「人生とは何か?」について考えさせることになる…。

・本巻「人間の運命 1 次郎の生いたち—序巻」は、新潮社版『芹澤光治良作品集』第七巻「海に鳴る碑/愛と知と悲しみと」(昭 49・2 刊)所収の「海に鳴る碑」の著者訂正本を底本にしている。その目次頁に〈次郎の生いたち 改題〉、〈「人間の運命」第一巻とする〉と書き入れがある。また、タイトル頁には〈海に鳴る碑〉を消して、〈人間の運命 序章〉〈次郎の誕生と幼年時代〉とある。本巻ではこれらを参考に、全体の構成から巻名を定めた。
なお、作品末尾に〈一九八五年八月十日 三度目の訂正 於山小屋〉とあり、丁寧に作品が点検されたことと、軽井沢の別荘で最終作業を終えたことが判る。

【編集付記より抜粋】

(4)「心に響く本　芹沢光治良「人間の運命」より（インターネット 2011/04/26）

・内容は、宗教・貧困・学問・仲間・漁業・恋愛・結婚・戦争・官僚・政治・文学・師弟・友人・親子・兄弟・夫婦・留学・実業・地震・病気・・・人が生きている限り出会うさまざまなことが、五十年にわたる日本と世界の歴史に、主人公の人生を絡めながら描かれています。

・「この小説によって、私は人間の宿命を描くばかりでなく、私の世代の生きた証言を後に来る人々に残したいと希っている。」という作者の言葉どおり、立派な証言を受け取るこができた感動で、私はまだその余韻に浸っています

●「全巻目次」

・人間の運命１　「次郎の生いたち」　・人間の運命２　「親と子」
・人間の運命３　「友情」　・人間の運命４　「愛」
・人間の運命５　「出発」　・人間の運命６　「失われた人」
・人間の運命７　「結婚」　・人間の運命８　「孤独の道」
・人間の運命９　「嵐のまえ」」　・人間の運命１０「愛と死」
・人間の運命１１「夫婦の絆」　・人間の運命１２「戦野にたつ」
・人間の運命１３「暗い日々」　・人間の運命１４「夜明け」
・人間の運命１５「再会」　・人間の運命１６「遠ざかった明日」

以上

第１回　『人間の運命１「次郎の生いたち」第１章（P1-15）　レジメ　(2024/6/16)

①「5 月 4 日」。森常造の家で端午の節句では賑(にぎ)やかであった。

（森次郎（芹沢光治良）の誕生日　明治 29 年 5 月 4 日）

②「おたつ」16 才から 20 年嫁にも行かないで森家に働いている。

③長男（一郎）お産の時（P4）

・三日も苦しんだ末に長男を生んだ。　肥立ちが悪かった。

・十二代常衛門（つねえもん）たるべき男子がさずかる。

④長男（一郎）生まれたのを機に、家督を常造夫婦に森家の家督をゆずる。(P7)

・私も 54 才で隠居し、家督を 24 才の常造夫婦に家督をゆずる。

・隠居するとは、楽しく死ぬようなものですから。

「家系図（略）」　　(P338)

「長三郎＝つぎ」
＋――――――＋――――――――――＋
「吉蔵」　「くめ＝常吉（祖父）」　「源蔵（長男・浜の家）」
＋
「はる＝常造（父）」
＋――――――――――＋
「金江＝光治良（次郎）」　　「真一」

「問いかけ」

・家督制度が現在も存在していたらどう思いますか。

・54 才で隠居する。24 才で戸主になる。

・年齢だけで比較すると、
現在 60 才で定年。結婚年齢は男女とも 27 才とのこと。(2022 年)
（財産や地位を長男が引き継ぐ制度はやはり問題があるのでは・・）
※明治時代の家督制度とは、明治 31 年 7 月 16 日から昭和 22 年 5 月 2 日まで施行されていた旧民法の遺産相続方法で、家制度における家族の代表者（戸主（こしゅ））としての権利や地位、一家の財産を長男が引き継ぐ制度。
1898 年に明治民法によって「家制度」が制定されたのがはじまりです。
この法律が制定された理由は、国民に対して天皇が絶対的な存在であることを知らせるためです。 当時の日本では、天皇の存在を認識していない国民も少なからず存在していたことから、天皇制と似た制度として家制度を法律によって制定したのです。(インターネットより)

⑤次郎の誕生

・「産湯（うぶゆ）がわくのを待てないで、端午の柏餅の湯を産湯にあびるなんて、とんでもない孫ですわ、きっとこいつは出世しますぞ、わしはたのしみでなあ・・」

「森次郎はこんな風にして誕生して、先ず女の産着をきせられたのだった」

「問いかけ」

・平和で穏やかで裕福な森家に次郎の誕生です。
今後どの様な人生を歩むのでしょうか。
※裕福な網元の森家に誕生した次郎が、貧しい村の漁師になるという慣例を破って学問をする希望を幼い胸に抱くまでを書いている。
次郎の貧しい幼年期を描くとともに、貧しさの元凶となった次郎の父である常蔵の信仰にも触れている。ただ信仰に盲目になって教団に従うのではなく、信仰とは何か教団とは何か、また神とは・・と悩んだ常蔵の生涯は、果たして次郎の運命にどんな影響を与えていくのか。

以上

第２回『「次郎の生いたち」第２章（P16-30)』　レジメ　(2024/7/14)

（１）「次郎の七夜のお祝いの宵であった。」

・川名のお宅から「女の子の宮詣りの衣装が届く・・・」　(P16)

「問いかけ」

・何故「女の子の宮詣り衣装」が届いたのか？
※はる子の父より「今回は女児で安産だと、お前様が前から申しておられた心をくみ、安産を願って・安産のお守りのつもりで作りました女児用の祝衣、お納めください。」

（２）常造が「今日、役場の方へ辞表を出してきました」　(P19)

・この家をつぐのには学問はいらないというので、学校を続けさせてもらえなかったから・・家をつがしてもらうと思いまして・・・。
・お父さんにもせんだいのように楽隠居してもらいたいから、役場も今が辞め時だと思いまして・・・
・「浜の家では、忠一郎が失敗したから、意見があるだろう。
お前は、あの時、はまの家の忠一郎や義次郎のように、学問させてくれなかったからということを、根にもって俺のいうことなんか耳に入らないようだからなあ」(P20)

（３）「くめ女の心配事」(P21)

・夫の知りたいのは息子の胸のなかの難しいことであり、息子の方は、父に話せない難しいものを胸にいだいていることを。そのことで、実は三年近く黙って独り苦しみなやんでいたのだ。

「問いかけ」

・この時代（明治 29 年頃）「学問と仕事（生き方）」をどのように考えられていたと思いますか。　（忠一郎の失敗とは・・）

（４）「常衛門の語る森家の実情」(P22)

※「津元(つもと)（網元)」・「網戸（あんど）（網の株持)」・「網子（あんこ）（働き手の漁師)」

・魚が少なく、我入道の海浜（かいひん）に漁業権を持っている網元は、ほとんど網を使う機会がない。網元はどこも、お手上げで、近年津元や網戸持ちという言葉さえ一般に

通用しない始末だ。
・常衛門は、新しい網元らしく生きられる方法を探して、ようやく千葉方面から巾着網（きんちゃくあみ）を採り入れて、近海に近づく鰯（いわし）を取ることで、からくも網子達の暮しを支えている現状である。
・結局、魚類が近づくのを待代わりに、進んで遠く沖へ迎えて漁をすべきであるが、そのために、漁船を大きくするより他にない。（網元から船元に変わった・・）

・①「網子（あんこ）の配（わ）け代（しろ）の問題」（P25）

12 月末から３月末までの西風の季節のため出漁できないため、貯金するように注意するが、持った金はすぐに使ってしまう。
・②「戸倉の田地の問題」（P25）
毎年戸倉の西山から「２０俵から２５俵」の年貢が届いて来る。
あの田地は先祖が代々つたえたものだから、どんな場合にも、手放してはいかんぞ。
年貢米がはいるから、網子を助けてこれたからな。

「問いかけ」

・常造は、森家の実情を聞かされてどのような事を感じたと思いますか。

（５）「次郎は先代（長三郎）の生まれ変わりだぞ」（P27）
・（常衛門（つねえもん）は、二晩、夢枕に立って、先代が告げたんだぞ。
・「祖父さんの生まれ変わりだなんてきめて育てたら、次郎は一人前の男にはなれないですよ。」

「問いかけ」

・なぜ、生まれ変わりだとしたら、次郎は一人前の男になれないと思いますか。

（６）「はる子の胸の中の賭け」（P27-30）
・常造は殆ど毎晩、二、三時間読書をする。（P27）
・一郎のお産後、肥立ちが悪くて、・・十日ばかりして、「鈴木さん」というお婆さんが来てくれた。（実家の母があなたの関係者だと思って病室に通した・・）
・二時間近く静かに神さんの話をして、お米を二粒くらいのませて、私の躰をさすってくれた。　あのお婆さんは、天理教の祈祷師でした。
・そのお婆さんのお話しで、二つのことを、はっきり思いだされた。（P28）
①わたしが素直でないために、主人の心に添い切っていない。
わたしは心が歪んでいて、ご主人を疑っているから、肥立ちがわる。
②お婆さんの信じている神さんは、元来お産の神さんだと言って、みんなからあがめられてたんですって・・。
その神さんに帯屋ゆるしをお願いすると、だれでも必ず安産する。
特に、主人の心に添って家庭の土台になっているような妻なら、きまって安産させてもらえる。
・あのお婆さんはあなたがよこしたのだって・・・そうしたら、いち度に胸がすっきりとしました。

「問いかけ」

・はる子は、なぜ、お助け人の「鈴木さん」に出会ったと思いますか・・。

又、この出会いが、次郎を置いてまでして、夫に従って生きていく人生を選んだきっかけになったのでしょうか。

・「Ｐ１８」にある**「わたくし、自分を賭けたつもりでしたが、主人が勝ったのです。」**の意味は、常造が、「鈴木さん」をよこして私の心が変わった事なのか。

（７）「常造の堅い決心」（P30）

・常造ははる子の勘の鋭さを初めて知って、驚くとともに、真面目に自分の心の生活に語らなければならないと、堅く決心した。

・二人の子供を儲けても、なお本気に自己を妻に伝え得なかったとは、愚かな夫だと、常造は自己反省に苦しんだのだった。

「問いかけ」

・皆さん、自分の心の生活を心許す方に語っていますか。

以上